

小板井屋敷遺跡 8

－福岡県小郡市小板井所在遺跡の調査報告－

小郡市文化財調査報告書第291集

2015

小郡市教育委員会

<序文>

今回報告します「小板井屋敷遺跡」は小郡市の中央に位置します。小板井地区は、地区計画が策定されており、計画的なまちづくりが行われています。宅地建設に先立つ調査の結果、この地には弥生時代から現代まで連続とした歴史が続いていることがわかりました。

調査にあたりましては、関係諸機関、周辺住民の皆様、そして現地作業にあたった地元作業員の皆様などのご理解とご協力をいただきました。記して感謝を申し上げ、序文といたします。

平成27年3月31日

小郡市教育委員会 教育長 清武輝

<例言>

1. 本書は、平成25年度に行った小郡市小板井に所在する三栄ホーム株式会社による宅地建設に関する埋蔵文化財発掘調査報告書である。調査は小郡市教育委員会文化財課が実施した。
2. 調査期間は、平成25年7月29日から平成25年9月30日まで実施した。調査面積は、116㎡である。
3. 遺構の実測は坂井貴志が、遺物の実測は久住愛子が行った。遺物の撮影は（有）システム・レコに委託した。カマド出土鉄製品・土壌のX線CT撮影は、九州歴史資料館の協力を得た。
4. 本書中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土地院第Ⅱ系（世界測地系）に拠る。
5. 遺物・実測図・写真は、小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管・管理している。
6. 本書の執筆は第4章を坂井、そのほかの執筆・編集は坂井の助力を得て、山崎頼人が行った。

<目次>

第1章 調査の経過と組織	1
第2章 位置と環境	1
第3章 調査の成果	2
第4章 調査成果のまとめ	13

第1図 小板井屋敷遺跡S調査区位置図(S=1/150)	第2図 小板井屋敷遺跡S南区遺構配置図(S=1/60)
第3図 小板井屋敷遺跡S南区南壁土層・1～3号溝土層断面図(S=1/60)	
第4図 小板井屋敷遺跡S北区遺構配置図(S=1/60)	第5図 1～3号溝出土土器実測図(S=1/3)
第6図 1号掘立柱建物平・断面図(S=1/60)	第7図 住居跡・土坑出土土器実測図(S=1/3)
第8図 出土石器・鉄製品実測図(S=1/2)	第9図 2号カマド平・断面図(S=1/20)
第1表 出土遺物観察表	

図版1 ①小板井屋敷遺跡S南区全景(西から)	②小板井屋敷遺跡S北区全景(西から)
図版2 ①南区SD03土層断面(北から)	②南区SD03全景(南から)
図版3 ①2・3号カマド火床面検出状況(東から)	②3号カマド土層堆積状況(南東から)
③2号カマド土層堆積状況(北から)	
図版4 カマド状遺構の調査	図版5 出土遺物①
図版6 出土遺物②	

第1章 調査の経過と組織

1. 調査に至る経過

小坂井屋敷遺跡8の発掘調査は、三栄ホーム株式会社 代表取締役 福田澄雄氏より提出された住宅建設(2戸)に伴う埋蔵文化財の有無についての照会に始まる。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「小坂井屋敷遺跡」に含まれるため、文化財保護法93条関係書類の提出を求めた(25小教文第3019号(平成25年5月15日付回答))。平成25年7月16日付けで、「埋蔵文化財の発掘の届出について」の文書が提出され、それを元に建築の協議を行った。最終的に基礎工事により遺構に影響が出る範囲、合計116mについて発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は平成25年7月29日から同年9月30日にかけて実施した。調査の主な経過は以下のとおり。

- 7月29日(月) 表土剥ぎ1日目 南側区画より開始。現況GL-70cmで剥いでいく。
- 7月30日(火) 表土剥ぎ2日目 午前で南区終了、北区へ。
- 7月31日(水) 表土剥ぎ3日目 北区続き。表土剥ぎ終了。
- 8月1日(木) 作業員導入。
- 8月6日(火) 酷暑。「段丘崖」埋土の下より大溝検出。一連の区画溝である。
- 8月8日(木) 午前 中学生職場体験。北区の溝を掘削。
- 8月9日(金) 南区:SD-1・2の実測 北区:溝掘削。
- 8月19日(月) 北区:SD-3掘削。南区:SD-3南側より掘削開始。
- 8月28日(水) 調査区画中央部の排土搬出。南区:SD-3掘削、SD-1・2間の遺構検出。
- 8月29日(木) 台風接近(15号)につき養生。
- 9月16日(月) 南区:遺構平面図実測。
- 9月18日(水) 午後南区:全景撮影。
- 9月19日(木) 南区:埋め戻し。⇒ 北区へ 南区上に排土置き場の土を持ってくる。
- 9月24日(火) 北区:住居群掘削。1・2号カマド平面図実測。
- 9月25日(水) 3号カマド平面実測。住居群掘削終了。
- 9月26日(木) 午前清掃・全景撮影。2・3号カマド半裁及びB1/4撮影、測図。
- 9月30日(月) 北区:埋め戻し。現場終了。

調査組織

【平成25年度調査 26年度整理作業】

小郡市教育委員会

教育長 清武 輝

教育部長 佐藤 秀行

文化財課 課長 片岡 宏二

係長 柏原 孝俊

嘱託技師 坂井 貴志(調査担当)(平成26年度から大野城市教育委員会嘱託)

技師 山崎 頼人(整理担当)(平成26年度)

第2章 位置と環境

詳しくは小郡市文化財調査報告書第290集「小坂井屋敷遺跡6・7」をご参照いただきたい。

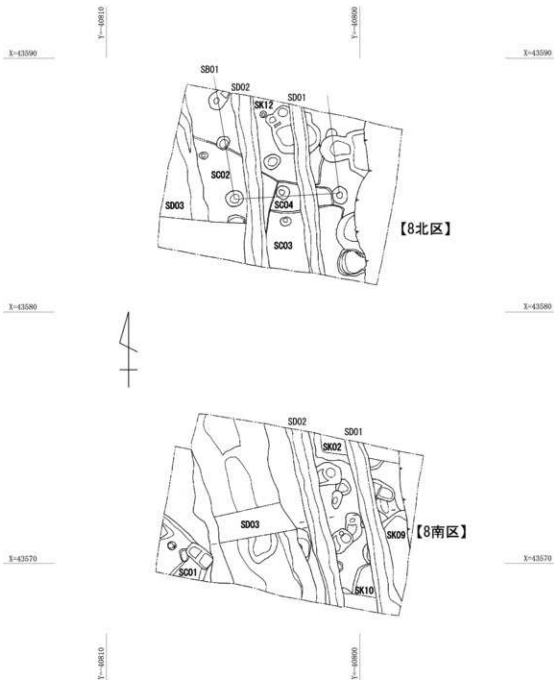
第3章 調査の成果

1. 調査の概要

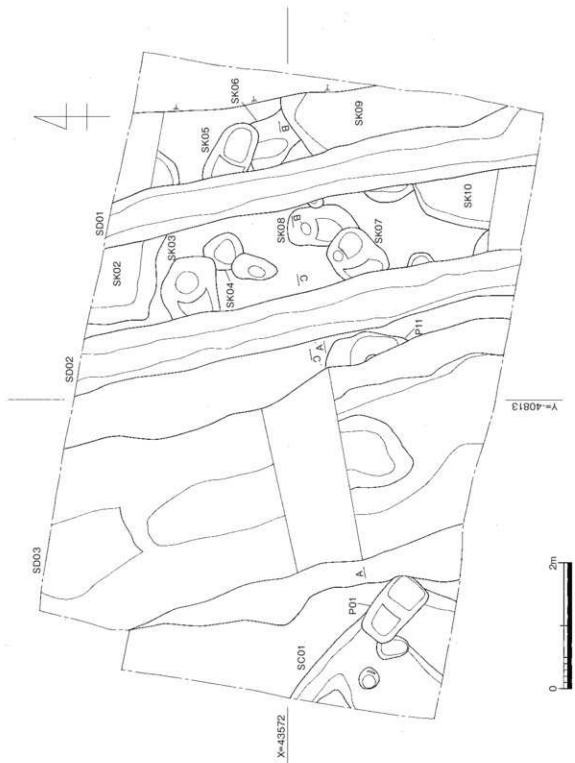
小坂井屋敷遺跡8は小坂井2区公民館の南側に位置し、遺跡がのる南北に長い段丘の東縁部分にあたる。小坂井屋敷遺跡5・6・7地点に隣接する（位置図や各調査区の合成図は小郡市文化財調査報告書第290集を参照）。

北区と南区の2調査区に分かれ、規模から小坂井屋敷遺跡5・6で報告されている溝と同一と考えられる近世代の方形区画溝が検出された（第1図）。小坂井「屋敷」という字名からも当地域に屋敷地があったことが推定され、その区画溝である可能性がある。5地点で東西方向に長さ51.2mの延長が検出された大溝が6地点で屈曲し8地点へつながり、北北東方向に35.2m以上延びる。

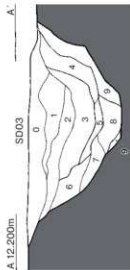
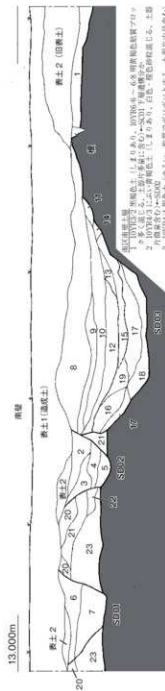
調査の進行上、南区から調査を始め、南区・北区と通した遺構番号を振っている。連続する溝などの遺構は同じ番号を振っている。



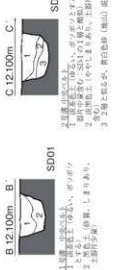
第1図 小坂井屋敷遺跡8調査区位置図 (S=1/150)



第2図 小柄井原敷遺跡8南区遺構配置図 (S=1/60)



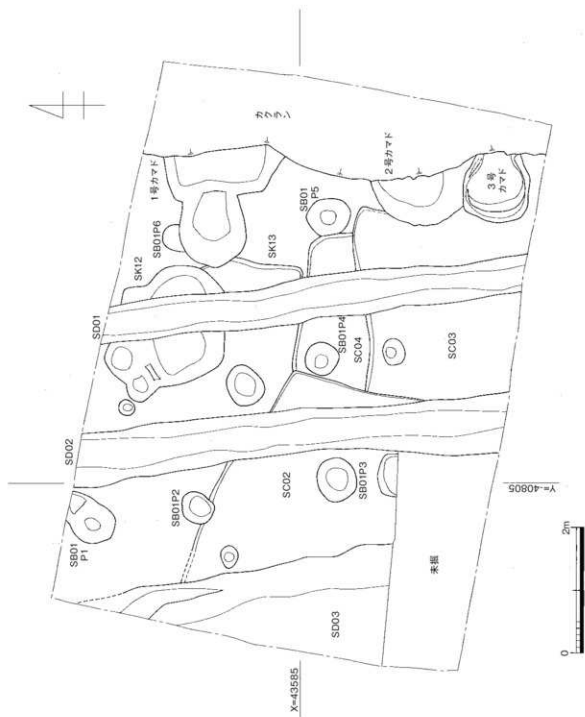
1 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 2 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 3 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 4 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 5 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 6 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 7 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 8 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 9 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 10 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 11 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 12 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 13 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 14 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 15 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 16 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 17 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 18 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 19 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 20 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 21 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 22 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 23 10756.4 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量



1 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 2 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量
 3 黄土 (4~6) 層厚約 1.5m あり、3m 大小の小石・土砂併存多量

第3図 小坂井原敷道跡8南区南壁土層、及び1~3号溝土層断面図 (S=1/60)





第4図 小松井屋敷遺跡8北区遺構配置図 (S=1/60)

2. 調査の成果

1. 溝

1号溝 (第1・2・3・4図 図版1)〈南区・北区〉

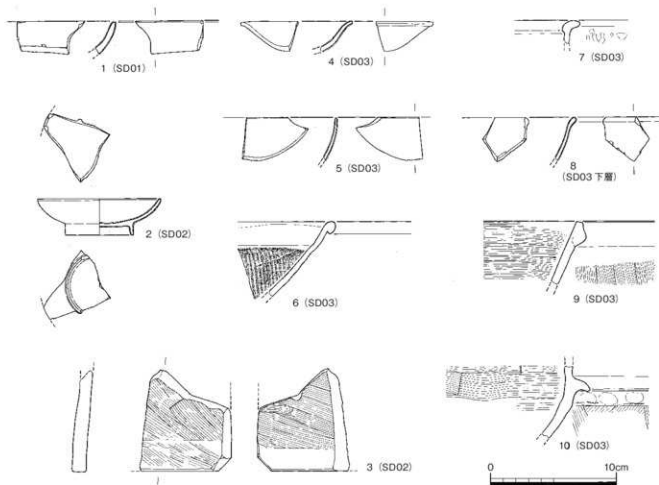
南区東端から北区中央へ連続する小溝で、N-10°-Wの方向で走る。調査区は途切れるが、8地点で20.7m分の延長が確認できる。2号溝と対になっている。2号溝が南区壁の観察では3号溝を切っており、1・2号溝は3号溝の埋没後の掘削と考えられる(平面図では切り合いを表現できていないが、検出面の深さによる影響である)。幅150cm、深さ70cm、断面は逆台形を呈す。上層に褐色土、下層に黒褐色土が堆積する。いずれの埋土もしまりはなく、土器片・炭化物をわずかに含んでいる。

出土遺物(第5図 図版5) 染付皿口縁部(1)が出土した。内面に松葉様の連続文、外面に山水画がみられる。

2号溝 (第1・2・3・4図 図版1)〈南区・北区〉

南区中央から北区中央へ連続する小溝で、N-10°-Wの方向で走る。調査区は途切れるが8地点で20.6m分の延長が確認できる。1号溝と対になっている。南区南壁の観察では3号溝を切っており、1・2号溝は3号溝の埋没後の掘削と考えられる(平面図では切り合いを表現できていないが、検出面の高さによる影響である)。幅120cm、深さ60cm、断面は緩やかに開くU字形もしくは逆台形を呈す。上層にぶい黄褐~褐色土、下層に灰黄褐~黒褐色土が堆積する。いずれの埋土もしまりはなく、土器片をわずかに含んでいる。

出土遺物(第5図 図版5) 染付壺(2)、土師質土器の置きカマド(3)が出土した。染付壺は高めの高台がつく。見込み圏線内部に「寿」の文字が確認できる。外面高台内にも蓮の文様が施さ



第5図 1~3号溝出土土器実測図 (S=1/3)

れる。

3号溝 (第1・2・3・4図 図版1・2) (南区・北区)

南区中央から北区西端へ連続する大溝で、段丘のへりに沿う形でN-20°-Wの方向で走る。周辺調査区でも確認されており、8地点では20.7m分の延長が確認できる。1・2号溝とは方向が少し異なっている。南区南壁の観察では2号溝に切られている(平面図では切り合いを表現できていないが、検出面の高さによる影響である)。南区中央では溝底に幅80cm、長さ4m程の長細い土坑状の窪みがある。25cm~30cm程の深さである。溝の規模は南区の壁では幅390cm、深さ110cm、断面は緩やかに開く逆台形を呈す。既往の調査では掘り直しの有無に言及がなく、堆積状況については不明なところがあった。今回報告するにあたり、他地点を含めた大溝の堆積状況を再確認した。検討の結果、大溝は数回の掘り直しが窺え、8地点では2回以上の掘り直しを想定した(第3図)。南区の溝中央ベルトの土層堆積では、掘削土の流入(9層)が東側からみられ、それを切り込むかたちで溝底の小規模な掘り込みが行われている(8層下)。その後、西側からも掘削土の流入がみられ、この段階で掘り込みがある(4・5層下)。4~6層の堆積後には再度、掘り直しが行われ、粘性のある土壌が堆積する。これらの掘り直しが、部分的なものかどうかはわからない。なお、大溝の時期は、この掘り直しの状況も鑑みながら検討しなければならない。17世紀以降の所産とされているが、出土遺物は矮小で、出土層位も詳細まではわからず判断が難しい。反省点である。

出土物(第5・8図 図版5・6) 土師質羽釜鈿部(10)、陶器播鉢(6)、染付碗(5)、陶器皿(4)、陶器小壺(7)が出土した。なお、下層からは青磁碗(8)、鉄製刀子(8図5)、鉄製火箸(8図6)等が出土した。

2. 掘立柱建物

1号掘立柱建物

(第6図 図版1)

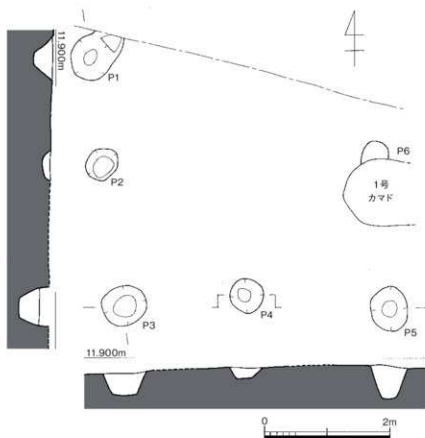
北区で検出した掘立柱建物である。1号カマドに切られる。1・2号溝とは重なる個所で検出されているが、直接の切り合い関係はない。主軸はN-9°-Wと、1・2号溝の方向とほぼ同じである。3間以上×2間の掘立柱建物で、規模は桁行4.5m以上×梁行4.3mである。掘り方は円形~長円形を基調とし、長径0.6~1.0m、短径0.5~0.6m、深さは0.15~0.5mを測る。出土遺物はみられない。

3. 住居跡

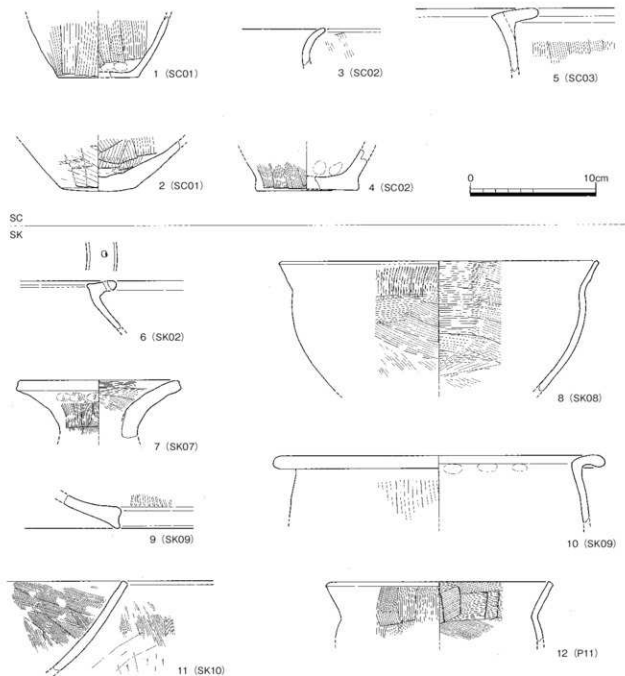
1号住居跡

(第2図 図版1)

南区南西端で検出した堅穴住居である。お



第6図 1号掘立柱建物平面図 (S=1/60)



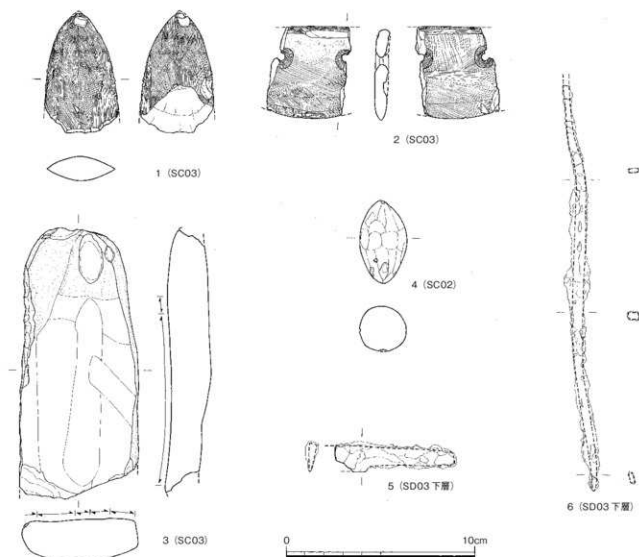
第7図 住居跡および土坑出土土器実測図 (S = 1/3)

よそ南東-北西方向の主軸をもつ。埋土が黒褐色土と地山ブロックを多く含み、しまりが強い。貼床層での検出で、下層遺構のみ残存していた可能性が考えられる。検出面から完掘レベルまでは15cm程度である。南東の短辺ではテラス状の面があり、調査区西壁付近では地山土(黄褐色粘質土)が10cm程度盛り上がり残る箇所がある。支柱や付属施設については不明である。

出土遺物(第7図) 弥生土器甕(1・2)が出土した。(2)は外面はタタキがのこっており、底部はレンズ状である。

2号住居跡(第3図 図版1)

北区南西で検出した竪穴住居である。およそ西北西-東北東方向の主軸をもつ。1・3号溝、1号掘立柱建物に切られている。規模は長軸5m以上、短軸3.5m以上、検出面からの深さは12cm程度である。埋土は黒褐色土を主体とする。北区では地盤が砂質土となっている。貼床は確認でき



第8図 出土土器・鉄製品実測図 (S = 1/2)

ない。主柱や付属施設については不明である。

出土遺物（第7・8図 図版6） 弥生土器甕口縁部片（3）、壺底部（4）が出土した。他に土製投弾（8図4）が出土した。

3号住居跡（第3図 図版1）

北区南東で検出した竪穴住居である。およそ東西方向の主軸をもつかと思われる。1・2号溝、2・3号カマド、2号住居に切られている。4号住居を切る。規模は東西28m以上、南北26m以上、検出面からの深さは5cm程度である。埋土は黒褐色土を主体とする。主柱や付属施設については不明である。

出土遺物（第8図 図版6） 弥生土器口縁部片（5）が出土した。他に頁岩製磨製石剣切先（8図1）、暗紫色泥岩石磨丁（8図2）、緑色片岩製砥石（8図3）が出土した。

4号住居跡（第4図 図版1）

北区中央で検出した竪穴住居である。およそ東西方向の主軸をもつ。1号溝、1号掘立柱建物、3号住居に切られている。規模は東西23m以上、南北1.1m以上、検出面からの深さは5cm程度である。埋土は黒褐色土を主体とする。主柱や付属施設については不明である。

4. 土坑・ピット

調査段階では土坑として一括されて番号が付されている。主に土坑について詳細を報告する。

1号ピット (第2図 図版1)

南区南西で検出した。3号溝に切られ、1号住居を切っている。平面プランは隅丸長方形である。主軸を西北西-東南東に持ち、西側深さ30cmでテラス状の段がつき、東側へ45cm下がる。埋土は黒褐色土を主体とする。出土遺物はみられない。

2号土坑 (第2図 図版1)

南区北東で検出した。1号溝に切られ、北側部分は調査区外に及ぶ。平面プランは隅丸方形と思われる。主軸を東西に持ち、東西2.8m程、南北90cm以上、深さは40cmほどである。埋土は黒褐色～灰褐色の砂質土を主体とする。南区でみられる東半の土坑群は、1・2号溝の検出面である堆積土上面(層)を除去した下層から検出されたものである(第3図)。調査区外に及ぶため、全体形状が不明であるが、堅穴住居(状遺構)の可能性もある。

出土遺物(第7図 図版6)弥生土器無頸壺口縁部片(6)が出土した。穿孔1か所が確認できる。

3号土坑 (第2図 図版1)

南区北東で検出した。1号溝に切られ、北側部分は調査区外に及ぶ。平面プランは隅丸方形と思われる。主軸を東西に持ち、東西2.8m程、南北90cm以上、深さは40cmほどである。埋土は黒褐色～灰褐色の砂質土を主体とする。出土遺物はみられない。

9号土坑 (第2図 図版1)

南区東側で検出した。1号溝、10号土坑に切られ、東側部分は調査区外に及ぶ。平面プランは隅丸方形と思われる。主軸を北東-南西に持ち、長軸2.4m以上、短軸2.4m程、深さは20～25cmほどである。埋土は黒褐色～灰褐色の砂質土を主体とする。

出土遺物(第7図 図版6)弥生土器甕口縁部(10)、丹塗りの筒型器台脚部片(9)が出土した。

10号土坑 (第2図 図版1)

南区南東側で検出した。1号溝に切られ、9号土坑を切る。南側は調査区外に及ぶ。平面プランは隅丸(長)方形と思われる。主軸を南北に持つと思われる、長軸1.3m以上、短軸1.3m程、深さは30cmほどである。埋土は黒褐色～灰褐色の砂質土を主体とする。

出土遺物(第7図 図版6)弥生土器鉢口縁部(11)が出土した。

11号ピット (第2図 図版1)

南区南側で検出した。1号溝に切られている。このピットも1・2・3号溝の検出面下から検出された。平面プランは隅丸方形で1辺およそ1.5m程である。南側深さ40cmでテラス面を持ち、さらに15cm程下がる。その面からさらに長円形(50cm×40cm)の掘り込みがあり、10cm程度下がる。埋土は黒褐色～灰褐色の砂質土を主体とする。

出土遺物(第7図 図版6)弥生土器甕口縁部(12)が出土した。

12号土坑 (第2図 図版1)

北区北側で検出した。1号溝に切られ、13号土坑を切っている。平面プランは隅丸方形形状を呈する。1.8m×2.0mで、南側の深さは50cmである。西側にテラス面を持ち、北側ではピット状の掘り込みがある。埋土は黒褐色～灰褐色の砂質土を主体とする。出土遺物はみられない。

13号土坑 (第4図 図版1)

北区北側で検出した。1号溝、12号土坑に切られる。平面プランは隅丸長方形形状を呈するかと

思われる。長軸 1.6 m × 短軸 0.9 m で、深さ 10 cm に満たない。埋土は黒褐色～灰褐色の砂質土を主体とする。出土遺物はみられない。

5. カマド状遺構

北区の東側で南北に並んで検出された粘土構築とその周辺の焼土を伴う円形土坑群である。調査区東側では攪乱が大きく入っており、削平を受けている。

検出段階で円形土坑内に強い被熱を伴っていることから、当初は铸造土坑の可能性を考慮して調査を進めた。①覆い屋の存在、②遺構平面形の認定（被熱部分よりも外側が掘り方である可能性）③作業面（床面）の認定（複数操業の有無）、④関連遺物の出土状況、⑤微細遺物の注意、グリッドごとに土壌を取り上げることも考える ⑥周辺遺構の位置づけ（排滓場）⑦土坑群の関係（セット関係、工程ごと、もしくは種別ごとの铸造土坑の可能性）などの点に留意した。

その後、2・3号土坑では円形の粘土構築層に棧瓦が入っており、数段並べられている状況がみられた。最終的に、铸造土坑でみられる鉄滓や鉄片などの排滓などが確認できず、周辺の近世遺跡で確認されるカマド状の遺構であると考えに至った。

いずれも東西方向に軸を持ち、東側に焚口を持つと思われるが、カマドはいずれも上面及び焚口部を大幅に削平されるため、全容は不明である。そのうち、2・3号カマドの2基においては炉壁の一部ではあるが残存し、その炉壁内に瓦を構築材として使用していることが明らかとなった。

代表して2号カマドの個別図を掲載し、報告する。

1号カマド（第4図 図版4）

北側調査区北東部に検出。上面が大幅に削平され火床面ののみ残存する。砂地に掘り込まれた径 1.05 × 1.25 m、深さ 18 cm の楕円形を呈する土坑内に粘土で構築されたカマドである。

全体的に被熱で硬化・赤色化するが、燃焼室奥壁部分は還元色を呈し、中央部は特に被熱して黄橙色を呈している。

2号カマド（第4・9図 図版3・4）

北側調査区南東隅に検出。3号住居を切る。3号カマドとは同軸に並列し、1号カマドより南3 m に位置する。上面及び焚口である東端部は削平を受け、基底部付近のみの残存である。

ひとまわり大きい土坑内に構築されたカマドで、カマド本体の規模は、現状東西 1 m、南北 0.9 cm、最終床面までの高さ 15 cm。馬蹄形に粘土で成形されており、粘土内に瓦片を用いて骨材としている。瓦列は1段分を検出、本来は粘土と互層状に積まれていたものと思われる。燃焼室側に向いた部分は被熱で赤色化する。

燃焼室壁面は、丁寧に粘土が塗り込められており、地山が砂地であるためか、土坑状の掘り込み屑部を黒褐色の粘質土で整形し、その上に壁面を粘土で作りだしている様子が看取される。

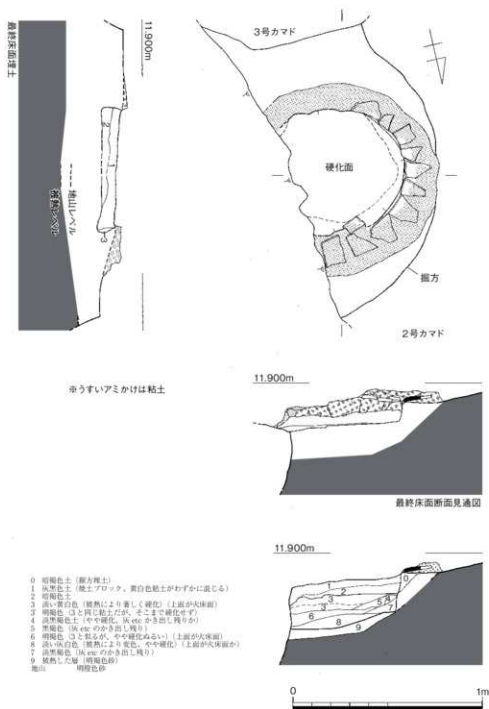
火床面は粘土の貼床で平坦に作られる。被熱が著しく黄白色を呈し多数のヒビ割れも見られる。火床面の断割り土層により、2面の焼土・硬化面が認められ、少なくとも3回の操業面を想定できる。壁面での作り替え等は確認できなかった。

分厚く粘土で成形された最終の床面構築粘土中から、「鉄製品」が出土した。九州歴史資料館にてX線CT撮影の結果、板状の鉄製品であることが判明。また、その下層の6・8層にも金属片が存在することが判明している。これらは、調理具の破損に伴うものかと考えている。

3号カマド（第4図 図版3・4）

北側調査区南東隅に検出。3号住居を切る。2号カマドと同軸、隣接して構築される。2号カマドと同様、上面および焚口部は削平される。

ひとまわり大きい土坑内に構築され、カマド本体の規模は、現状で径約 1 m、最終床面までの深さ 15 cm を測る。2号カマドと同様、瓦片を用いて骨材としており、4段の瓦列が確認された。瓦の燃焼室側部分は被熱により赤色化する。火床面は粘土の貼床で平坦に作られ、被熱により硬化し



第9図 2号カマド平・断面図 (S = 1/20)

黄白色を呈す。

以上、遺構所見を記したが、特に2・3号カマドに関しては、基底部付近とはいえ火床およびカマド壁体の構築の様子が判る遺存状況であった。使用頻度を示すものか、内面は勿論、土坑状の掘り込み外にも被熱・赤色化が顕著にみられ、2・3号カマドに切られる3号住居内の弥生土器片も被熱により剥離・変色していることが確認された。

カマドは、東隣接地にある水路擁壁造成の際に焚き口部分を削平されている。今回カマドを検出する際、併せてそのカクラン部分もある程度掘削しているが、その際にカマドの構築に使われたと思しき瓦・耐火レンガが大量に出土した。いずれも完形のものではなく、総数は86+ (レンガ3)

点にのぼる。出土した瓦・耐火レンガには、カマド本体と同様被熱・硬化した粘土が付着したままのものが多く、骨材として使用されたと推測し得るものである。

このようなカマドの類例として、久留米市に所在する「久留米城下町遺跡 23 次」（久文報 339：2013）、「久留米城下町 両替町遺跡」（久文報 116：1996）がある。城下町 23 次では石敷きの燃焼室や石組みカマドが検出された。調査地は久留米城下に整備された久留米城下町通町十丁目にあたり、明治 5（1872）年の「通町絵図」によれば「麦麩」を製造した「大石太作」の敷地にあたるため醸造用のカマドとしての性格が考えられる。両替町遺跡からも同様の切石積みカマドが複数基検出され、酒・醤油などの醸造カマドとしての性格付けがなされている。

また、兵庫県伊丹市に所在する伊丹郷町遺跡（兵庫県埋文報 164：1997）においても江戸後期頃の石組みのカマドが検出されている。伊丹郷町遺跡は伊丹城下に整備され、「御前酒」の産地として発展した町である。検出されたカマドは平面円形を呈しており、酒造における蒸米用と考えられる。

以上の例は石組みで構築されたカマドであるが、構築材の違いだけで瓦使用のものと大した差はないように思われる。

第 4 章 調査成果のまとめ

「小板井屋敷遺跡 6・7」（小都市文化財調査報告書第 290 集）で、大溝で区画された近世の屋敷地については既に考察している。ここでは、その後の時代に構築されたカマド状遺構や集落について若干述べておきたい。

1. カマド状遺構の年代

国内で棧瓦が使用されるようになったのは、江戸時代初期頃の延宝二（1674）年に近江の御用瓦師である西村半兵衛の開発による。近世当時、幕府は城郭や寺社・役所・御用町人など限られた層にのみ「瓦葺き」を許可し、庶民の家屋は薬根根もしくは萱・板葺きに規制されていて、瓦は高級建材に位置づけられていた。しかし、町など家屋が集中する箇所では火事が起きると大火となる可能性が高いため、瓦葺きを許可することもあった。

当時、久留米藩であった小都市域でも同様、「小郡町焼失 寛政十一未（1799）」「三月当町大火に及ぶ、居宅並に土蔵□□建物等失うもの也（1801）」とあるように大火が重なったため久留米藩は瓦葺きを許している【公用見聞録】。資料によると嘉永 2 年（1849）が最も遡る例のようである。但し、在郷町にある「蔵」のみが許可の対象であり、他の居宅には制限が残る。明治維新（1900）以後、そうした制限が撤廃され、漆喰塗りのなまこ壁に瓦をふいた土蔵作りの家屋が立ち並ぶようになる。

さて、出土した構築瓦であるが、厚手のものが多く、「黒色に燻され銀化する」いわゆる近世瓦である。種類としては棧瓦の他、軒平・軒丸瓦・平瓦・丸瓦・袖瓦など屋根瓦各種が見られるが、完形のものではなく破片のみである。屋根材として使用しなくなった（もしくは破損品）ものを再加工したものである（棧瓦は棧部分を使用、袖瓦は袖部を打欠いて使用）。

一部の棧瓦・袖瓦の先端部端面には「○に+」の刻印が記されており、生産者の屋号を表したもので、産地は、瓦生産地として著名な城島地域であろうか。また、筑後南部地域（柳川市等）で出土例の多い土師質瓦も数点確認できるが、当初の用途は不明である。

時期については、先述の通り瓦葺きが広く浸透していくのは明治以降（19 世紀後半以降）であるので、このカマドの構築時期もその頃に求めたい。

2. 小板井集落について

小板井屋敷でみられる屋敷地を区画する大溝が構築された時期、また、このカマド状遺構が構築されたころの集落の様相はどうだったのだろうか。

小板井屋敷遺跡 8 周辺の江戸・明治期を物語る資料・地図等はありません。当時、小板井

集落周辺には往還「彦山道」(長崎街道)が通っていた。彦山道は、西には肥前日代宿へ通じて長崎街道へと合流、東は延宝元(1673)年に松崎宿經由ルートになるまで大板井・井上集落を通り甘木・秋月へと続いていた。明治33(1900)年の小郡市地図では、小郡町から東へ2本の道が延びるが、北側の道が井上經由、南側が新しい松崎經由の道である。この他、「小道」とされながらも久留米から筑前へ抜ける交通路である旧松崎街道(横隈街道)などが記載されている(すぐ東を流れる築地川沿いに横隈街道は通っている)。

明治期の小板井集落は、彦山道の新・旧道、そして横隈街道に囲まれるような集落となっている。宿場町であった松崎、在町であった小郡ほどではないものの、集落を結ぶ道の交差点に位置していたから人・物流は少なくなかったものと推測される。集落規模そのものは、現在の小字で言う「屋敷」「運輸」にあたり、然程広くはない。

明治22(1889)年に描かれた「福岡縣筑後国御原郡小板井村全圖」では、小板井屋敷遺跡1・5・6・8地点の箇所は「畑」となっている。調査で検出された大溝に開繕されていたであろう「屋敷地」は現在、寺が所在している。妙見山本照寺(日蓮宗)と称し、明治22年高木日野の開山とある。当初は説教所であったが、明治27年日鏡上人の時に独立、寺号取得となっている。

小板井屋敷8で検出されたカマドに使用された瓦は、棧瓦が多く、時期的にも合う。しかし、カマド焚口方向は寺とは逆の東向きであり、別棟の車裏などがあった可能性もあるが詳細は不明である。

第1表 出土遺物観察表

出土遺物	検出番号	図説番号	器種	法量 cm (法元)	色調	胎土	肌底	成形・調整	備考
SD1	5-1	5-6	染付 皿	残存高:2.6	—	緑密 1mm以下の砂粒をごく僅かに含む	緑密	ロコロ成形後、輪軸。	—
	5-2	5-1	染付 茶	口:9.7 器高:2.9 高台径:5.4	—	緑密 1mm以下の砂粒をごく僅かに含む	緑密	ロコロ成形後、輪軸。 高台脚部は丸軸。	—
SD2	5-3	6-12	土質質 茶カマド	残存高:8.0	外:橙~に白い層 内:橙~に白い層	ほぼ青 1mm以下の砂粒を少し含む	肌	体部は内外面とも胎削ナデ成形ハケメ。 脚部はその後、ヨコナデ。	—
	5-4	5-8	陶器 鉢	残存高:2.45	外:灰白 内:灰白	緑密 細砂粒をごく僅かに含む	緑密	ロコロ成形後、輪軸。	—
下層	5-5	5-7	染付 碗	残存高:3.45	—	緑密 細砂粒をごく僅かに含む	緑密	ロコロ成形後、輪軸、染付。	—
	5-6	5-11	陶器 磁鉢	残存高:5.9	外:灰赤 内:灰赤	緑密 細砂粒をごく僅かに含む	緑密	ロコロ成形後、磨目指す。口縁部のみ輪軸。	—
SD3	5-7	5-10	陶器 小壺	残存高:1.6	外:灰赤 内:に白い層	青 1mm以下の砂粒を僅かに含む	緑密	ロコロ成形。	反軸がかかる
	5-8	5-9	青磁 碗	残存高:3.45	外:に白い層 内:に白い層	緑密 細砂粒をごく僅かに含む	緑密	ロコロ成形後、輪軸。	軸は直し口摩滅。 ヒシネールか。
	5-9	6-13	土質質 茶	残存高:4.9	外:に白い層~灰褐 内:に白い層~に白い層	ほぼ青 1mm以下の砂粒を少し含む	肌	口縁部は胎削ナデ、他はハケメ。	外側にスチ付着
	5-10	6-14	土質質 茶	残存高:5.6	外:に白い層~灰褐 内:に白い層	ほぼ青 2mm以下の砂粒を少し含む	肌	筒形胎削ナデ、他はハケメ。	体部外面下平。 スチ付着
	5-11	6-14	不明 底:6.4	残存高:4.6	外:浅黄褐色~に白い黄褐色 内:に白い黄褐色	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む。	肌	体部内面はハケメ、底部内面はナデ。他はハケメ後ナデ。	体部外面~底部外面にかけて黒染
SC1	7-1	—	発火土器 不明 底:6.4	残存高:4.6	外:浅黄褐色~に白い黄褐色 内:に白い黄褐色	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む。	肌	体部内面はハケメ、底部内面はナデ。他はハケメ後ナデ。	体部外面~底部外面にかけて黒染
	7-2	—	発火土器 不明 底:5.7	残存高:3.9	外:に白い層~灰褐 内:橙	粗 3mm以下の砂粒を多く含む	肌	体部内面はハケメ、体部外面は杖状工具ナデ後、ハケメ後タタキ後ナデ。	—
SC2	7-3	—	発火土器 不明 底:6.2	残存高:3.2	外:に白い層 内:橙	青 1mm以下の砂粒を僅かに含む	肌	体部内面はヨコナデ。体部外面はハケメ。他はナデ。	—
	7-4	—	発火土器 不明 底:2.05	残存高:2.05	外:浅黄褐色 内:に白い黄褐色	ほぼ青 2mm以下の砂粒を少し含む	肌	内面はヨコナデ。外面はハケメ後ヨコナデ。	内面にコケ付着。小穴の丸、縁部に黒染あり。
SC3	7-5	—	発火土器 不明 底:4.7	残存高:4.7	外:に白い層 内:橙	やや粗 4mm以下の砂粒をやや多く含む	肌	口縁部~頸部はヨコナデ。体部内面はナデ。体部外面はハケメ。	—
SK2	7-6	6-16	発火土器 無残破 上蓋部:(13.0) 器高:4.3	残存高:3.7	外:浅黄褐色 内:に白い黄褐色	ほぼ青 2mm以下の砂粒を少し含む	肌	口縁部~頸部はヨコナデ。 体部内面はナデ。他は器唇摩滅のため観察不明。	口縁部に穿孔あり(上下・下)
SK7	7-7	—	発火土器 器台 口:(25.3) 残存高:4.3	外:浅黄褐色 内:灰白~褐灰	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む。	肌	上蓋部はヨコナデ。他はハケメ。	内面に黒染	
SK8	7-8	5-2	発火土器 鉢 口:(25.3) 残存高:10.2	外:灰白~褐灰 内:に白い黄褐色~褐灰	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む。	肌	口縁部はヨコナデ。他はハケメ。	同一個体片も1点あり。外面に黒染あり。縁部にやや黒染あり。	
SK9	7-9	—	発火土器 無形器台 口:(26.2) 残存高:5.3	残存高:2.6	外:橙(胎土)+赤(赤色顔料) 内:橙	青 2mm以下の砂粒を僅かに含む	肌	外:ヘラミガキ。 内面~頸部はヨコナデ。	丹塗磨研土器
	7-10	6-15	発火土器 不明 口:(26.2) 残存高:5.3	残存高:5.3	外:に白い黄褐色 内:浅黄褐色~灰黄褐色	やや粗 5mmの砂粒をやや多く含む。	肌	口縁部~頸部はヨコナデ。 体部内面はナデ。体部外面はハケメ。 外:ヘラミガキ。後半はハケメ。器唇摩滅のため不鮮明。	口縁部、体部外面にスチ付着
SK10	7-11	—	発火土器 鉢 口:(17.9) 残存高:4.55	残存高:7.05	外:浅黄褐色 内:橙~に白い層	やや粗 3mm以下の砂粒をやや多く含む	肌	外:ヘラミガキ。後半はハケメ。器唇摩滅のため不鮮明。	体部外面下平に黒染
SK11	7-12	5-3	発火土器 不明 口:(17.9) 残存高:4.55	残存高:4.55	外:に白い層~褐灰 内:灰黄褐色~褐灰	やや粗 2mm以下の砂粒をやや多く含む。	肌	口縁部はヨコナデ。他はハケメ。	内、外面とも黒染



①小坂井屋敷遺跡8南区全景（西から）



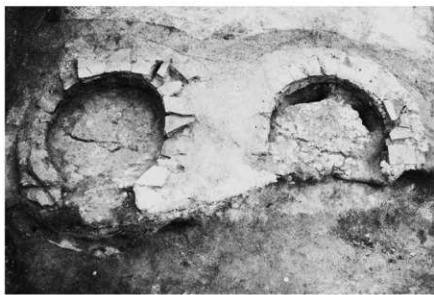
②小坂井屋敷遺跡8北区全景（西から）



①南区 SD03 土層断面 (北から)



②南区 SD03 全景 (南から)



① 2・3号カマド
火床面検出状況（東から）



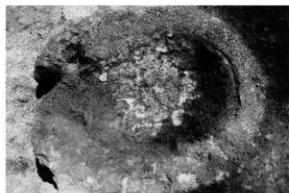
② 3号カマド土層堆積状況
（南東から）



③ 2号カマド土層堆積状況
（北から）



① 1号カマド土層堆積状況（南から）



② 1号カマド火床面検出状況（北から）



③ 2号カマド火床面検出状況（東から）



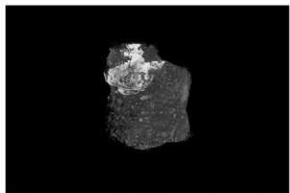
④ 3号カマド火床面検出状況（東から）



⑤ 2号カマド土層堆積状況（東から）



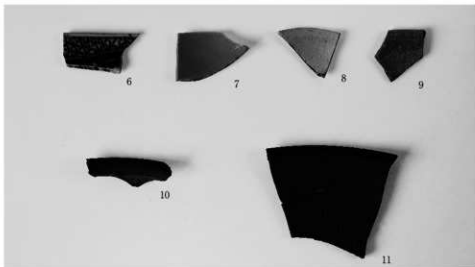
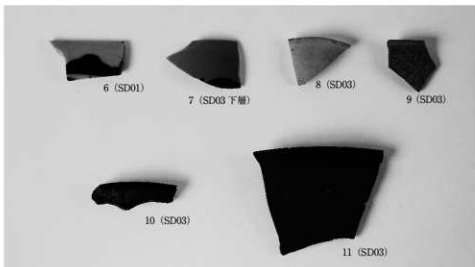
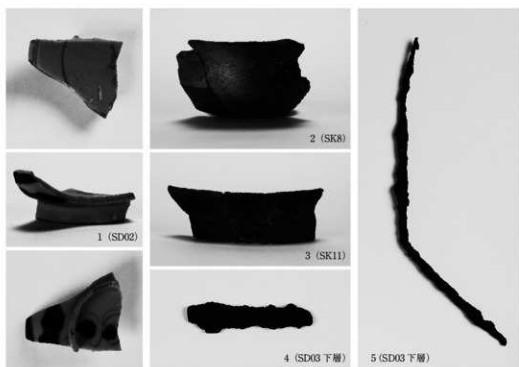
⑥ 2号カマド最終床面下出土鉄片



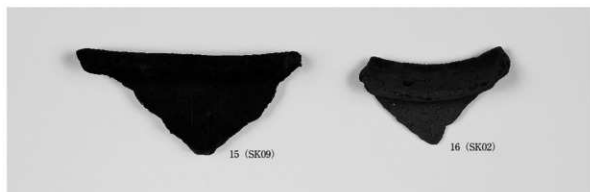
⑦ 2号カマド出土鉄片・土壌CT画像



⑧ 2号カマド床面下土壌鉄片散在状況CT画像



出土遺物①



出土遺物②

報 告 書 抄 録

ふりがな	こいたいやしきいせき8							
書名	小板井屋敷遺跡8							
副書名	福岡県小郡市小板井所在遺跡の調査報告							
巻次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第291集							
編著者名	山崎 頼人 坂井 貴志							
編集機関	小郡市教育委員会 小郡市埋蔵文化財調査センター							
所在位置	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5147-3 Ⅱ0942-75-7555							
発行年月日	平成27年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	しょごいち 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こいたいやしき 小板井屋敷 いせき 遺跡	ふくおかけん 福岡県 おごおりし 小郡市 こいたいやし 小板井	40216	10030 } 10034	33° 26' 10"	130° 33' 60"	2013・7・29 ～ 2013・9・30	116㎡	住宅建設
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
小板井屋敷 遺跡8	集落	弥生 近世		住居 掘立柱建物 溝		弥生土器・石器 陶磁器・鉄製品 棧瓦		
<p>小板井屋敷遺跡は宝満川右岸、標高12mの段丘上に立地する。調査の結果、弥生時代中期～後期の竪穴住居3軒、近世期の溝3条のほか、近世以前の掘立柱建物跡、土坑（ピット）13基を検出した。検出された近世期の溝は調査区を縦断し、屋敷地が推定される当遺跡の東を画するものと推定される。</p>								

こいたいやしきいせき 小板井屋敷遺跡8
小郡市文化財調査報告書第291集
平成27年3月31日
発行 小郡市教育委員会 福岡県小郡市小郡255-1
出版 片山印刷有限公司 福岡県小郡市祇園1丁目8-15

